

野党連合はなぜまとまらないのか

台湾総統選、与党候補がリード

福田 円 法政大学教授

来年1月投票の台湾総統選挙戦では、与党民進党の候補者である頼清徳氏のリードが続いている。しかし、その支持率は40%付近で伸び悩んでいる。4年前の同選挙での蔡英文総統・頼清徳副総統ペアの得票数は史上最多の約817万票であり、得票率は約57%で、快勝であった。また、現在の蔡英文総統による執政への満足度は50%前後であり、2期目の政権が早めにレームダック化する台湾政治では異例の状況である。

人気や話題性は

乏しい頼氏

現職の副総統でもある頼清徳氏の支持率が、こ

台湾の頼清徳副総統=4月12日、台北 (EPA時事)



れらの数値よりもかなり低いのはなぜだろうか。

第一に、頼清徳氏によって立つ政治的立場は、蔡英文氏よりも伝統的な民進党の立場に近く、無党派層の取り込みに苦戦している。台湾政治における最大の対立軸は中国との距離感であるが、頼氏は

蔡氏よりも対中強硬、かつ独立派に近いと認識している有権者が多い。頼氏自身は昨年後半から「蔡英文路線の継承」に繰り返し言及し、今年夏の米国でのトランジットも米政府と調整して低調なものにまとめた。しかし、それでも、頼氏が総統になった場合、中国との緊張は継続、あるいは高まり得るとの認識は根強い。

第二に、民進党政権が既に8年続き、有権者の間に同党への失望や飽きが見られることがある。特に、4年前、8年前の選挙で蔡英文氏の快勝に貢献したのは若者の投票だった。だが、経済格差、不動産価格の高騰、初任給の低迷など若者の生活環境はなかなか改善せず、期待を裏切られた若年層



台湾の蔡英文総統（左）と頼清徳副総統＝
2020年5月、台北、総統府提供（AFP時事）

の民進党離れ、ないしは投票率低下が懸念されている。

第三に、頼清徳氏個人のイメージの問題もあるかもしれない。頼氏は将来総統選に出馬することを長らく期待されてきたエリート政治家で、母子家庭から苦学して医師となった愛妻家でもある。私生活が謎に包まれた女

性政治家で、おそらくそうであるが故に「萌えキャラ化」されがちな蔡英文氏や、想定外の言動で人々の興味を引く柯文哲氏のようなキャラクター性がなく、個人としての人気や話題性には乏しい。

上記のような状況であるため、今回は与野党候補一対一の戦いになれば、野党には少なくとも接戦に持ち込めるチャンスがあった。ところが、野党陣営は3人ももの候補が出馬し、有権者の支持は分散、候補者の一本化は難しい状況となっている。

譲らない野党3候補

最大野党である国民党は、本来であれば民進党の最大のライバルとなるはずだ。しかし、国民党

の支持基盤は、この8年間でかなり縮小した。その上、新北市長として人気を博していた侯友宜候補は、出馬表明までに時間がかかり過ぎた上に、国民党内の公認候補指名プロセスも不透明であった。また、地方での政治経験しかなく、台湾全体の政治や国際戦略を語れないという侯氏の欠点が、選挙活動を開始して早々に露呈した。その結果、候補者に内定した5月以来、侯友宜氏の支持率は落ち込み、若干回復した現在でも20%程度までしか伸びていない。

これに対して、民進党に失望した若年層と、国民党を見限った層を取り込んで支持率を急速に伸ばしたのが、民衆党の柯文哲氏であった。柯文哲

氏は、民進党との選挙協力によって医師から台北市長に転身したが、民進党とたもとを分かった後は、二大政党制へのオルタナティブをアピールしつつ、民進党一強体制の阻止を目指している。また、その歯に衣着せぬ物が若者からの人気を集めている。柯文哲氏の支持率は、国民党候補者が内定した5月から7月にかけて上昇し、一時は頼清徳氏に迫った。しかし、国民党の態勢立て直しや本人の失言などにより、現在の支持率は侯友宜氏と同じく20%付近を推移している。

さらに情勢を不透明にしたのが、国民党公認候補の指名争いで敗れた郭台銘氏が8月末に無所属



侯友宜新北市長=9月27日、台北 (AFP時事)



台湾民衆党の柯文哲主席=8月11日、台北 (AFP時事)



台湾の実業家、郭台銘氏=8月28日、台北 (AFP時事)

二大政党制の終焉か

での出馬表明をしたことだ。郭氏の目標は、分裂した野党候補をまとめ、自分が「台湾のCEO」になることである。しかし、彼は柯文哲氏と協力関係にあったにもかかわらず国民党の公認候補獲得に名乗りを上げ、敗れたら協力するという国民党首脳部との約束もほごにした経緯があり、野党陣営をまとめられる人物だとは到底思えない。しかも、彼が鴻海精密工業の創業者として中国共産党と関係を持つことは周知の事実であり、その対中姿勢は候補者4人中

で最も融和的である。よつて、郭氏の支持率は10%を切り、低迷しつつある。野党の3候補は、全員が自身を総統候補とする連合しか考えていない。この点で妥協する可能性がわずかにあるとすれば、柯文哲氏であるが、同氏が侯友宜・国民党、郭台銘陣営のいずれかと協力すれば、民進党に失望して彼を支持する無党派層の大部分は、頼清徳・民進党支持に流れるか、投票の棄権（無投票）を選択する可能性が高い。また、政治的立場の違いを軽視した連合は、柯文哲氏が

立ち上げた民衆党の存在意義にも影響するであろう。柯文哲氏としては候補者第2位を維持し、再び侯友宜氏に差をつけたところであるが、民衆党の準備不足もあり、政戦後半で彼が再び浮上するのは容易ではなさそうだ。また、民衆党とは異なり、国民党の組織力と動員力はいまだに侮れず、侯友宜氏の支持率までもが10%以下で低迷し、柯文哲氏が結果的に浮上するというシナリオも描きにくい。

ここまでの観察をまとめると、野党連合の可能性は極めて低く、野党分裂のまま第2位の候補者が急速に支持を伸ばし、頼清徳氏に肉薄する可能性もまた低そうである。これから先の総統選挙戦は、頼清徳氏が他の候補者たちを一定程度リードする形が続くだろう。頼氏としては、支持率を40%台まで上げるだけ後ろへと引き上げ、最終的には有権者からの圧倒的な信任を得て当選することが今後の目標となる。そのためには、民進党から離れてしまった支持層をいかに取り戻し、蔡英文総統の路線を引き継ぎつつも、いかに独自性と新しさを打ち出すかという「自己と

の戦い」が最も重要となる。総統選挙と同日に行われる立法委員選挙については稿を改めたいが、この戦いに勝てれば、民進党が継続して立法院で過半数の議席を獲得できる可能性も高まるだろう。

総統選挙で頼清徳氏が当選すれば、民主化後の台湾では初めて、同一政

党の執政が2期8年以上継続することとなる。そこには、以下のような意味を読み取ることが可能だろう。

第一に、台湾の有権者は蔡英文・民進党政権の路線に一定の評価を与え、その継続を信任したことになる。内政問題の各領域についてはさまざまに批判もあるが、総統選挙の性格から見れば、蔡英文政権が確立した「中華

民国台湾」としての国際社会でのポジションが肯定されたと考えるべきであろう。その背景には、台湾における継続的な世論調査結果にも見られるような、2014年以降の「台湾人」アイデンティティの高まりがあることは間違いない。

第二に、第一点とも関係するが、昨今の台湾を取り巻く国際環境、つまり、米中競争の中では、中国政府から対話の道を閉ざされ、各種の威嚇を受けていることが民進党の

失点にならなかつたという点である。実際、選挙戦においても、この点について野党陣営の歯切れは悪く、中国との対話をアピールすることはほとんどない。それは、主権に関する譲歩の可能性

を伴う対中対話の模索が、有権者に評価されないことの裏返しでもある。

第三は、4年前の選挙の頃から言われていることであるが、台湾における二大政党制の終焉^{しゅうえん}である。仮に、今回の選挙で頼清徳氏が当選、立法院

(国会)でも民進党が過半数を占めることになれば、今後の台湾政治においては民進党の一強体制がさらに強固なものとなるだろう。

国際的な注目に反して、

現在のところは中国との「戦争か平和か」「対話か緊張か」という争点が台湾

の選挙戦で果たしている役割は大きくない。それでも、中国の台湾に対する各種工作、台湾侵攻の可能性が無くなることは

なく、地域の国際政治を揺るがし続けるであろう。台湾の有権者がどのような視点で、何を選んでいくのかを、私たちは隣人として、しっかりと理解しなければならぬ。



福田 円

ふくだ・まどか

法政大学法学部教授

国際基督教大学教養学部卒、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了、同後期博士課程単位取得退学。博士(政策・メディア)。国士舘大学21世紀アジア学部専任講師、法政大学法学部准教授などを経て、2017年より現職。著作に『中国外交と台湾—「一つの中国」原則の起源』(慶應義塾出版会、2013年)など。